

見上げる魚と目が合うか？

原田ゆう

登場人物

戸田梨絵

式守妙子

都心にあるビルの一室。

そこはファッションデザイナーやイラストレーターなどが共同で借りているアトリエ兼事務所であり、舞台となるのはその応接間のような部屋。

舞台下手にはソファと小さな棚。

中央には大きなテーブル、椅子は四脚。

上手にドアがあつて、外への出入り口（玄関）となつている。

舞台奥壁の下手半分は窓になつている。

部屋の中にはトルソーといくつか服のかけられているラックが置かれている。

舞台上では、大きなテーブルに梨絵と妙子が並んで座っている。

梨絵はぼんやりと虚空を見つめ、妙子はどこか一点をじっと見つめている。

梨絵は妙子の方を見る。妙子はしばらくしてから、梨絵の視線に気づく。

梨絵 溶けていく魚がいるって……知ってる？ 何千何万匹という魚が……群れで泳ぎながら青い海に……溶けていくの……徐々に徐々に体が……トロトロになつていくんだけど……魚の群れは……泳ぎ続けるのを……やめない。溶けて泳いで……泳いで溶けて……やがてトロトロは……とろみを失くして……水のようになる……でもね、中にはうまく溶け切れない魚もいて……その魚は溶けるんじゃないやなくて……バラバラになつていくの……目とかうろことかヒレとか尾っぽとか……バラバラに……ちぎれるんじゃないやなくて……パン、パンって……はズれていくの……それがプカプカと海に何年も何年も……漂つて漂つて……不意に消えるの……泡がはじけるように……消えるの、パって。

間。

妙子 え？

梨絵 え？

妙子 なんですか急に。

梨絵 いや、なんか。

妙子 なんか？

梨絵 なんか話した方がいいかなと。

妙子 ああ。

梨絵 沈黙に耐えられなくなつて。

妙子 ああ。

梨絵 思いつくままに。

妙子 え、あ、えっと、名前なんていうんですか？

梨絵 あ、戸田梨絵です。

妙子 あ、いや、その。

梨絵 え？

妙子 お魚の名前。

梨絵 ああ、魚の。  
妙子 はい。  
梨絵 分かんない。  
妙子 ああ。  
梨絵 だから思いつくままに。  
妙子 え？  
梨絵 なんていうか。  
妙子 はあ。  
梨絵 作り話というか作り魚というか。  
妙子 はあ。  
梨絵 口が勝手に。  
妙子 ああ。  
梨絵 いきなりあんなことがあって、ちよつと動揺してたんで。  
妙子 ああ。  
梨絵 信じられないね。  
妙子 え？  
梨絵 信じられる？  
妙子 お魚ですか？  
梨絵 いやいやいや。  
妙子 え？  
梨絵 面接の人。  
妙子 ああ。  
梨絵 あいつがデザイナー？  
妙子 たぶん。  
梨絵 うーん。  
妙子 ……。  
梨絵 どうなんだろう。  
妙子 ……。  
梨絵 あいつどうなんだろう。  
妙子 (苦笑)  
梨絵 信じられないね。  
妙子 (曖昧にうなづく)  
梨絵 なめやがって。  
妙子 ……。  
梨絵 アシスタント採用だからって。  
妙子 ああ…でも、  
梨絵 え？  
妙子 あ、でも、なんか、大変なことが…。  
梨絵 うん、余程のことがあったんだろうね。  
妙子 ええ。

梨絵 あんなにあからさまに顔から血の気が失せていくとは。  
妙子 ああ。  
梨絵 私、初めて見たよ。  
妙子 (微笑)  
梨絵 この世の終わり。  
妙子 (微笑)  
梨絵 この世の果て。  
妙子 (微笑)  
梨絵 諸行無常の響きあり。  
妙子 諸行無常の響きあり。  
梨絵 帰ってくるかな？  
妙子 帰ってくるって、  
梨絵 ま、言ってたけどね、どうだろうね。  
妙子 ……  
梨絵 こっちだって時間をあけて来てるのにな。  
妙子 (微笑)  
梨絵 雇用される側は常に弱い立場だよ。  
妙子 (微笑)  
梨絵 何があっただらうね？  
妙子 さあ。  
梨絵 左側だけ袖がないの。  
妙子 え。  
梨絵 上着の袖の部分を付け忘れて納品しちゃって。  
妙子 ……  
梨絵 それくらい絶望具合だったよね、あいつ。  
妙子 そうですね。  
梨絵 すごい怒られるんだらうな。  
妙子 ……  
梨絵 顧客がひとり減っちゃったんだらうな。  
妙子 ……  
梨絵 大丈夫なのかこの会社。  
妙子 ……  
梨絵 やっぱりデザイン関係の人なの？  
妙子 いえ、違います。  
梨絵 あ、違うんだ。私も。  
妙子 そうなんですか。  
梨絵 どれどれ、ちよつと見せて。  
妙子 あ。

梨絵は妙子の履歴書を手にとって、読み始める。

梨絵 へー、意外に若くない。

妙子 ……。

梨絵 なんだ、そうか、三十路越えは私くらいかと思ってたのに。

妙子 ……。

梨絵 給食センターで勤続、十二年。

妙子 ……。

梨絵 すごい、そんなに長く同じところで働けるとは。

妙子 ……。

梨絵 私なんかだいたい一年半くらいしかもたないのに。

妙子 ……。

梨絵 調理士からファッションデザイナーへ。

妙子 ……。

梨絵 思い切った鞍替えだね。

妙子 ……。

梨絵 趣味はセレクトショップめぐり、おっ、いかにもって感じ。

妙子 ……。

梨絵 志望動機は、

妙子は履歴書を梨絵の手から遠慮がちに取り返す。

梨絵 んー？

妙子 いや、なんか。

梨絵 嫌なんだ、見られるの。

妙子 嫌っていうかなんていうか。

梨絵 私は平気だよ。

梨絵は自分の履歴書を妙子の目の前に差し出すが、妙子は手に取ろうとはしない。

妙子 ……。

梨絵 興味ないか。

妙子 ……。

梨絵 私、つつい人の庭に土足でズカズカと入り込んでいくのよね。

妙子 ……。

梨絵 お名前、式守妙子って読むの？

妙子 え、はい。

梨絵 ふりがな、ふってなかったから。

妙子 え……あ。

梨絵 妙って炒飯のチャ？

妙子 それは炒めるです。  
梨絵 あー。  
妙子 炒飯のチャは火に少ないで、私は女に少ない。  
梨絵 女に、少ない。  
妙子 ええ、まあ。  
梨絵 ふーん。

梨絵はまじまじと妙子を足先から頭頂まで見る。さらに、妙子の全体像を捉えようと妙子を見ながら立ち上がって離れていく。

梨絵 今日は何を着て行こうか、デザイナードレスの面接にリクルートスーツなんてセンスを疑われてしまう。かといって、奇をてらったヴィヴィットな色使いで上から下まで攻めまくるのも違う。落ち着いた大人の雰囲気醸し出せるように、まずは黒をベースに、シルエットを大事にしよう。パンツが黒はすぐ決定。上は白いブラウスが無難だけど、うーん、やっぱり白か、それで黒いジャケットを羽織って、うわっ、フツー、極めてフツー、安定感抜群のフツー具合、いやいやいや、アクセントをどこでつけるか、それで決まってくる。今日の占い、天秤座のラッキーカラーは青。じゃあ、ピアスを青にして、うん……それで？ それでどうする？ それでどうしよう、このまじや今年度のベストオブザフツーにノミネートされてしまう、うーん、なにかガツンとセンスのあるアクセントが欲しい。メガネ？ ネクタイ？ レースの手袋？ 下駄？ 眼帯？ マント？ 文金高島田？ 思い切ってこの上から着物を羽織る？ 肩にインコを乗せておく？ いやいやいやいや、あり得ないあり得ない、え、え、どうしよー、どうしよー、どうしよー、と三時間悩んだ挙句、もういいや、もういいやこれで、飛んで火に入る夏の虫とは私のこと、ってそれってどういうこと、ああ、もういい、これで、これでいこう、これで、これでいいのであります。

妙子 ……。  
梨絵 なんつって。

間。

妙子 え……。  
梨絵 え？  
妙子 ええ……。  
梨絵 ええ？  
妙子 合ってる。  
梨絵 おおっと。  
妙子 合いまくりです！  
梨絵 あらら。  
妙子 えええ……。  
梨絵 まさか当たるとはね。

妙子 すごい、なんですか、なんなんですか、何者ですか？  
梨絵 いや、テキトーだったんだけど。  
妙子 え、え、え、な、なんなんですか。

妙子は梨絵の履歴書を手に取って、読み始める。

妙子 なるほど、かなり職を転々とされているんですね。

梨絵 ええ、まあ。

妙子 そつかそつか、だからか。

梨絵 ん？

妙子 色々な職業を経験すると、他人のことが手に取るように分かるようになるってお祖母ちゃんが言っていました。あとトマトを食べると頭がよくなるとも。

梨絵 へえー。

妙子 サプライズですね。

梨絵 使い方が合ってるかな。

妙子 梨絵さんは、

梨絵 梨絵さん？

妙子 一見、面接に行くとは思えないラフでカジュアルな装いですけど、清潔感を損なっていない。ラフさを拡散させないような色使いと素材選びが絶妙。いい感じですね。

梨絵 ああ。

妙子 何より似合ってますよ、すごい似合ってます。大事ですね、似合うのって。

梨絵 ああ、どうも。

妙子 今日、ひと目見たときから劣等感というか敗北感というか、そういうものをモロに味わって、梨絵さんみたいな人が採用されるんだろうなって。

梨絵 そうなんだ。

妙子 だからさつきからちよつとよそよそしい態度をとってしまったって。

梨絵 いえいえ。

妙子 梨絵さんは服飾の仕事されてたんですか？

梨絵 デザイン関係はないけど、アパレルで働いたことはあるよ。

妙子 へー、やっぱそうですよね。何かしらファッション関係の仕事をしてるといいですよね。

梨絵 そんな変わらないよ。

妙子 私、甥っ子にオオカミを描いてあげたらバナナって言われて。

梨絵 え？

妙子 絵がすごい下手くそなんですよ。

梨絵 ああ。

妙子 梨絵さんは絵とか上手いんですか？

梨絵 好きでイラストみたいなのは描いたりするけど。

妙子 あー、やっぱりそうですよね。でも、求人応募資格には未経験OKってあったし。  
梨絵 うん。

妙子 年齢も不問。  
梨絵 そうだったね。  
妙子 女性限定。  
梨絵 人と話すのが好きな人。  
妙子 意欲のある人。  
梨絵 オリジナリティのある人。  
妙子 オリジナリティってなんですか？  
梨絵 え、個性じゃないの？  
妙子 個性。  
梨絵 うん。  
妙子 私のオリジナリティってなんですか？  
梨絵 え、え。  
妙子 自分じゃ分からないから。  
梨絵 いや、会ったばかりだし。  
妙子 でも、梨絵さん、オリジナリティだと思いますよ。  
梨絵 オリジナリティだと思ってるんだ。  
妙子 デザインの仕方とか教えてくれますよね？  
梨絵 そりゃね。  
妙子 いきなり仕事おしつけられたりしないですよね？  
梨絵 しないと思うけどね。  
妙子 すっごい不安です。まだ採用されてないですけど。  
梨絵 うん。  
妙子 ……。  
梨絵 なんかわいね。  
妙子 え？  
梨絵 その感じが。すっごい悪い言い方すると浮き足立ってる感じが。  
妙子 ……。  
梨絵 あれ？  
妙子 ……。  
梨絵 あれれ？  
妙子 ……。  
梨絵 気に障った？  
妙子 分からなくなるんですよね。  
梨絵 え？  
妙子 喋り過ぎたり喋らなさ過ぎたり。  
梨絵 ……。  
妙子 分からなくなるんですよね。丁度いいところってのが分からなくて、昔からそう、  
年を重ねてもほんとに重ねるだけで、変わらないんですよね。  
梨絵 いや別に、ダメとか言ってるわけじゃないよ。  
妙子 さっきのお魚の話。

梨絵 え？  
妙子 魚が溶けていくっていう。  
梨絵 ああ、その話。  
妙子 どれくらい生きてたら溶け始めるんですかね。  
梨絵 うーん、寿命みたいなもんなんじゃない、分かんないけど。  
妙子 寿命。  
梨絵 だって、溶け切ったら終わりでしょ。  
妙子 溶けるのってどんな気持ちなんだろう？  
梨絵 広がっていく感じ。孤独がね、溶けてね、みんなと一緒にっていく。  
妙子 ……。  
梨絵 どこまでが自分で、どこまでが他人、あ、他魚か、他魚か分からなくなる。  
妙子 ……。  
梨絵 自分が魚なのか海なのかも分からなくなって、やがては海に、そうそう、海になる。  
妙子 ……。  
梨絵 この世に存在していたのかさえも分からなくなるのでしょうか。  
妙子 ……。  
梨絵 なんつって。  
妙子 何が体が溶けていく魚と体がバラバラになっていく魚を分けるんでしょうね？  
梨絵 生まれつきなんじゃないの？  
妙子 日頃の行いは関係ないんですか？  
梨絵 え、例えば、良いことしたら体溶けていきますよってこと？  
妙子 はい。  
梨絵 魚にとって良いことって何だろうか？  
妙子 魚にとって良いことを産む。  
梨絵 たくさん卵を産む。  
妙子 ああ、なるほど。  
梨絵 生まれてきてしまったからには子孫を残さないといけないですからね。  
梨絵 ……。  
妙子 溶けていく方が気持ちよさそうだな。はずれていくのはバラバラになってから何年も漂ってしまうんですよ、それがヤだな。  
梨絵 話、よくおぼえてるね。  
妙子 あ、ほんとだ。  
梨絵 でも、やっぱり生まれつき決まっちゃってるんだよ。あらかじめ決まっていて、変えられないんだよ、良いことをしようが悪いことをしようが、何をしても変えられない。  
妙子 初めから溶けるかバラバラになるか決まっちゃってるんだよ。  
妙子 そういうものなんですかね。  
梨絵 え？

不意に梨絵は周囲を気にする。

妙子 え？

梨絵 ……揺れてる？

妙子 ……え？

梨絵 ……揺れてない？

妙子も地震が起きてるかどうかわからない。

妙子 ……揺れてないですよ。

梨絵 ……揺れてないか。

梨絵は窓を開けて、辺りを見回す。

梨絵 揺れてないみた——！

梨絵は少し前屈みになって外の一点を見る。

梨絵 ——。

梨絵は窓から後ずさる。見るからに動揺している。

妙子 どうしたんですか？

梨絵は窓の外を見るように指し示す。

妙子は窓の外を見る。

妙子 え、なんですか？

梨絵 屋上。

妙子 屋上？

梨絵 左斜め四十五度。

妙子は言われた方向を見る。

妙子 あ。

妙子と梨絵は顔を見合わせる。

梨絵 いるよね？

妙子 いますね。

梨絵 うわー。

妙子 あの人、何やってるんでしょうね？

梨絵 え？

妙子 え？

梨絵 え？

妙子 え？

梨絵 飛び降りでしょ。

妙子 おお、そういうことか。

梨絵 え、逆にあの人は何を？

妙子 探し物かなって。

梨絵 探し物？

妙子 いや、鍵でも落とすのかなって。

梨絵 どうして屋上の柵越えたところに鍵落とす？

妙子 落ちたら骨折じゃすまないですよね。

梨絵 すまないね。

妙子 昔のジャッキーならなんとか無事にやれるんだろうけど。

梨絵 今のジャッキーでもやれるに決まってんじゃない。

妙子 え、今のジャッキーやれますか？

梨絵 やれるよ、やれるに決まってんじゃない、そりゃとうにアラシスだよ、アラウンドシ

ックステイだけどさ、信じたいじゃん、やってほしいじゃん、崖の上から飛んでる気球

の上に飛びのってほしいじゃん、時計台から何度も落ちてほしいじゃん、ほぼほぼ九〇

度なビルの壁を駆け下りてほしいじゃんって、どうしてあの人あんなところに立ってい

ると思いますか？

妙子 え、肝だめしっていうか度胸だめしっていうか罰ゲームっていうか。

梨絵 肝だめしじゃないし度胸だめしじゃないし罰ゲームじゃないし。

妙子 そこをなんとか。

梨絵 いやいや、ちゃんと現実を直視しないと。

梨絵と妙子はあらためて屋上の人を見る。

梨絵 うわっ、ふらふらしてるじゃん。

妙子 ああ、なんか前後に揺れてますね。

梨絵 もう今にもって感じだね。

妙子 警察に電話しなきゃですね。

梨絵 誰かしてくれてるよきつと。

妙子 そうですか？

梨絵 結構目立つし。

妙子 ああ。

梨絵 あ、でも、どうだろう。

妙子 どうでしょうね。

梨絵 やっぱり電話するか。

梨絵は電話をかける。

梨絵 (電話) あ、警察ですか。あのービルの屋上になんか今にも飛び降りそうな人がいるんで通報したんですけど……あ、はい、場所は外苑前駅の近く……あ、はい……ガソリンスタンドの近くにあるビルです……住所はちよつとわからないです……えつと、他にはコンビニとちよつと横文字で読めないオシャレなショップがいくつもあるんですけど……ただの通行人なんで……すみません、ちよつと急いでるんで、よろしくおねがいします。

梨絵は電話を切る。

梨絵 よし、これで。

妙子 警察来るまでもちますかね。

梨絵 え、行く？

妙子 行きますか？

梨絵 でも、私達面接が。

妙子 ああ、そうですね。

梨絵 あいつ、戻ってくるかもしれないし。

妙子 そうですね。

梨絵 それにああいうのは慣れてる人がやらないと。

妙子 慣れてる人なんているんですか？

梨絵 いや、ほら、だから警察が。

妙子 警察、遅くないですか。

梨絵 電話したばっかだよ。

妙子 手遅れになりませんかね。

梨絵 行かないきゃダメか。

妙子 行かないきゃダメかもですね。

梨絵 でも、私達が行ったことで刺激しちゃって、煽ってしまうことになるかもよ。

妙子 あー、その責任はもてないですね。

梨絵 うん、だから、いいのよ。

梨絵は窓を閉める。

梨絵と妙子は椅子に座る。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 気になるね。

妙子 気になりますね。

梨絵 警察来てるのかな。

妙子 電話したばかりですよ。  
梨絵 やっぱ行きこうか？  
妙子 やっぱ行きますか？  
梨絵 うーん。  
妙子 神様にまかせましょうか。  
梨絵 神様？  
妙子 きっと神様なら救ってくれるんじゃないですか。  
梨絵 救ってくれるかな神様。  
妙子 でも、神様ですよ。  
梨絵 神様いるのかな。  
妙子 分かんないけど、私、ちょっと祈ってみます。

妙子は祈る。

梨絵 ……。

梨絵は妙子をじっと見つめている。

妙子 (祈ってる)

梨絵 ……。

妙子は祈りを終える。

妙子 これで大丈夫なんじゃないですか。  
梨絵 うんうん、そうだね。  
妙子 あの女の人、どんな人生を送ってきたんでしょうね。  
梨絵 え、男でしょ？  
妙子 女でしたよ。  
梨絵 いやいや、男だよ。  
妙子 シルエットがスラッとしてて、細身だったじゃないですか。  
梨絵 でも、短髪で身長もあつたよ。胸もなかったし。  
妙子 女だと思っただけだな。

妙子は窓を開ける。梨絵も窓辺へ行く。

妙子 うーん、やっぱ男か。  
梨絵 え、私、今、女だと思ったよ。  
妙子 え、男ですよ。  
梨絵 女でしょ。

梨絵と妙子はじっくり見る。

梨絵・妙子——。

梨絵と妙子はちよつと身を乗り出す。

梨絵・妙子 おおおおおおお！

梨絵と妙子は驚いてより身を乗り出す。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 ……いったかと思った。

妙子 ……。

梨絵 ……びっくりした。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 あ。

梨絵 あ。

梨絵と妙子は咄嗟に身を伏せる。

妙子 こっち見た。

梨絵 気づかれたかな。

妙子 気づかれたかもですね。

妙子は身を伏せたまま、窓を閉める。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 でも、気になる。

梨絵は恐る恐る窓を少し開けて、様子をうかがう。

梨絵 あっ、いない！

梨絵は窓を開ける。そして、下の方を見る。

妙子も立ち上がって、外を見る。

梨絵 ……。  
妙子 ……。  
梨絵 ……飛び降りたわけじゃない。  
妙子 はい。  
梨絵 消えたね。  
妙子 消えましたね。  
梨絵 うん。  
妙子 ……引き返したんじゃないですか？  
梨絵 そうだと思う。  
妙子 ……。  
梨絵 ……。  
妙子 よかったですね。  
梨絵 警察に連絡した方がいいのかな？  
妙子 ああ。  
梨絵 いったか、しなくても。飛び降りなかったわけだし。  
妙子 祈りが通じましたね。  
梨絵 あ、ね。

妙子は窓を閉める。

妙子 でも。  
梨絵 ん？  
妙子 ちよっと期待はずれな感じありませんか？  
梨絵 え？  
妙子 もう少し粘ってくれたらと思いませんか？  
梨絵 スゴイこと言うね。  
妙子 かといって、飛び降りてもらいたいわけでもないんですけど。  
梨絵 ……。  
妙子 もう少しスリルというかドキドキを味わっていたかったな。  
梨絵 ……。

間。

妙子 面接の人、まだ帰ってきませんね。  
梨絵 連絡もないし。  
妙子 梨絵さんもう他にお仕事、決まってるんですか？  
梨絵 ううん、どこも。決まってる？  
妙子 私もまだどこも。  
梨絵 ここ、けっこうギリギリなお給料だったよね。  
妙子 ええ、全然少ない。

梨絵 どうしてデザイナーになろうと？  
妙子 占いで。  
梨絵 ほー。  
妙子 池袋のハハにそう言われて。  
梨絵 それで長く続けた仕事をあっさりど？  
妙子 ええ、まあ。  
梨絵 いいの？  
妙子 別に未練は。  
梨絵 ああ、そっかそっか。  
妙子 梨絵さん、結婚されてるんですか？  
梨絵 そのうちに。  
妙子 ああ、恋人がいるんですね。  
梨絵 いや、いないけど。  
妙子 あれれ。  
梨絵 早く結婚したいっす。  
妙子 えー意外。  
梨絵 そう？  
妙子 もっと自由人なのかと。  
梨絵 いや、もう、ほんと、家庭に入りたいたっす。家庭を守りたいっすって何から家庭を守るのかは知らないけど、家庭を守りたいっす。ぶっちゃけもう働きたくないっす。主婦に懂れるっす。いやいや、まさか、こんなにも簡単に三十路を軽く超えるとは。友達はフェイスブックで息子娘との幸せな日々をアップしまくってるし。やばいやばい。  
妙子 そういう年頃ですからね。  
梨絵 子供かわい。ご飯を食べる、買い物に出かける、公園で遊ぶ、日常の些細な出来事でもアップしたくなる。夫は時折料理をつくったりして優しさを見せてくれるよ。独身女をつまらぬ愚痴など書き込んだら空気読めない極み。あの幸せな日々を泥を塗ってしまう。日常の陰りはいらぬよ。ああ、懂れる。心底、懂れる。多様な生き方の時代と言われているのに対して私は昭和の幸せな形に心が奪われてしまうのでしょうか。  
妙子 それは過渡期、境目に我々はいるからで、先行き不透明な時代の不安に前世代の幸せな形にすがってしまふのだ。  
梨絵 なんか難しいこと言ってる。  
妙子 と、元恋人に言われ、別れを切り出されたのは三カ月前のことです。  
梨絵 おおっと。  
妙子 我々は多様な生き方の見本になろうと。  
梨絵 それで納得？  
妙子 もうその前から崩壊の兆しがあつて。  
梨絵 ああ、なるほど。  
妙子 子供ができてたら違っていたんでしょうけど。  
梨絵 ……  
妙子 別に避妊してたわけでもないんですけど。

梨絵 ……。  
妙子 できなかったんですよね。  
梨絵 ……。  
妙子 やっぱりもつと若い人がいいんですかね？  
梨絵 浮気しやがったんだ。  
妙子 いや、今回の採用の。  
梨絵 ああ、こっち。  
妙子 若い人の方が面倒くさくないですからね。  
梨絵 歳をとればとるほど愚痴や文句が多くなってくるのは、科学的に証明されてるんだ  
つて。  
妙子 だから、おばさんは不平不満の垂れ流しを。  
梨絵 おいおい、おばさんて。  
妙子 え？  
梨絵 私達もそのコミュニティに片足をつっこんでいますよ。  
妙子 梨絵さんはおばさんじゃないですよ。  
梨絵 かたじけない。

間。

妙子 それにしても、どれくらいかかるんだろう。  
梨絵 一時間は余裕でかかるんじゃないの？  
妙子 一時間で戻ってきますかね？  
梨絵 まあ無理だろうけどね。  
妙子 そうですね。  
梨絵 あっちの人は戻ってきてたりして。

梨絵は窓を開ける。

梨絵 いるし。  
妙子 いるんですか？  
梨絵 いるよ。  
妙子 ……。  
梨絵 ……。

梨絵は窓を閉める。

梨絵 神様にまかせましょう。

梨絵はまた周囲を気にする。

梨絵 え？

妙子 え？

梨絵 ……また揺れてるよね？

妙子 え？

梨絵 揺れてるよ、さつきよりも強く。

妙子 ……揺れてます？

梨絵 揺れてるって。

妙子 でも、

梨絵と妙子は周囲を見渡す。

梨絵 ……揺れてないか。

妙子 揺れて……ないですよ。

梨絵 そっか、揺れてないか。なんなんださつきから。

間。

妙子 オガサワラさん、どんな服着てるんでしょうね。

梨絵 面接の人、オガサワラだっけ？

妙子 いや、屋上のあの人です。

梨絵 オガサワラ？

妙子 遠くてよく分かんないけど、感じる雰囲気がおガサワラっぽくないですか？

梨絵 オガサワラっぽいかな。

妙子 やっぱり見るからにみずぼらしい恰好してるんでしょうね、オガサワラは。

梨絵 服なんてどうでもいいんだよ、オガサワラは。

妙子 オガサワラがそれを着れば、飛び降りようなんて気にもならないそういう服ないですかね。

梨絵 え、拘束する感じ？

妙子 いや、オシャレな感じにして。

梨絵 着こなせるかな、オガサワラに。

妙子 着こなせますよ。というか、オガサワラに似合う服にしましょう。

梨絵 背伸びせずね。

妙子 なんか変わるような気がします。

梨絵 そんな単純なものなのかな。

妙子 まずは下着からですね。

梨絵 オガサワラは男にする？ 女にする？

妙子 あ、そっか、じゃ、もう男で。

梨絵 男かー。え、下着から？

妙子 ええ。

梨絵 オガサワラが恋人になったような気分。

妙子 より親身になれるじゃないですか。

梨絵 歳は三〇代後半なのかな。

妙子 身長は一七五センチくらい。

梨絵 体重は約六〇キロ。

妙子 青色のボクサーパンツ。

梨絵 うん。

妙子 七分袖の白シャツ。胸ポケットがボーダー柄。

梨絵 うんうん。

妙子 サルエル調のチノパンで、色はベージュ。

梨絵 ほうほう。

妙子 靴は黒のショートブーツ。

梨絵 好き好きそういうの。

妙子 柄編みのパナマハットがあってもいいかも。

梨絵 なるほどね。

妙子 これでオガサワラは飛び降りないんじゃないですか？

梨絵 でも、あれだね、二十代のファッションだね。オガサワラはもっとおっさんだよ、三十代後半でしょ？

妙子 あ、そっか。

梨絵 それにファッション誌そのもの感があるね。

妙子 え、オリジナリティ足らずですか？

梨絵 そうだね。

妙子 パラシュートを背負わせます。

梨絵 うわ、極端。逆に煽ってるし。

妙子 安心安全じゃないですか。

梨絵 まあ、何より問題はさ、どう着せるかってことだよ。

妙子 あ、そっか。

梨絵 今の全部着てもらうなら、オガサワラを一度全裸にさせないと。

妙子 全裸。

梨絵 オガサワラをどう全裸にするか問題。

妙子 太陽と……、

梨絵 北風。

妙子 ああ、北風。

梨絵 私達、太陽でもなければ北風でもないし。

妙子 環境変化で攻撃を仕掛けることができない。

梨絵 強風なんて吹かしたらそのまま落ちちゃうよ。

妙子 え、じゃあ、直接脱がしに行かなくっちゃですね。

梨絵 はい。

妙子 私脱ぐのか……。

梨絵 え、なんで？

妙子 そうした方が安心すると思ってる。

梨絵 飛び降りようとしてるところに見知らぬ女がやってきていきなり脱ぎ始めたらどう思うかなオガサワラ。

妙子 俺も脱がなきゃって。

梨絵 ならないならぬ。

妙子 えー。

梨絵 飛び降りをとめることよりも全裸にする方がむしろ難易度高い。

妙子 飛び降りか着替えかで飛び降りを選択しますか普通？

梨絵 いやいや、オガサワラのおかれている状況を鑑みないと。

妙子 ああ、そうだ、忘れてました。

梨絵 ジャケットなんかの上に羽織わせるんじゃないやだめなの？

妙子 デイティールって大事だと思うんです。

梨絵 でも、そんなこと言ってる余裕はないよ。

妙子 ジャケット一枚でいけるかな。

梨絵 そこをなんとかしないと。

妙子 オガサワラが着ているダサダサな服に合わせていかないですよね。

梨絵 あーそれにこだわる。

妙子 全体でどう見えるかってデイティールと同じくらい大事じゃないですか。

梨絵 ええまあ。

妙子 あまりにも浮いたジャケットだとオガサワラも納得いなくなっちゃって飛び降りちゃうと思うんですよ。

梨絵 動機まで変わっちゃう？

妙子 だから、やっぱり一度ちゃんとオガサワラを見ないと。オガサワラがどんなやつでどういう服を着ているのか、あと雰囲気とかまとってるオーラの色とかそういうのを見極めた上で選ばないといけないですね。

梨絵 ということは？

妙子 私、本当に行つてこようかな。

梨絵 行くんだ。

妙子 行かないとジャケット決められないじゃないですか。

梨絵 すごい情熱。

妙子 ここからじゃやっぱり顔が見えないですよね。

梨絵 そうだね。

妙子は窓を開ける。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 もしここで働くことになったら、窓を開けるたびにオガサワラのことを思い出すんだろうな。

妙子 ……。

梨絵 もしオガサワラが飛び降りでもしたら、いつまでも思い出し続けるのかな。



それ以上に怖いものがこの世にあったんだね……。

妙子 ……大丈夫ですか？

梨絵 あ、私、一体何をブツブツと。

妙子 ブツブツどころか、シャウトしてましたけど。

梨絵 ……。

妙子 ……。

妙子は窓を閉めようとする。

妙子 あれ、オガサワラが。

梨絵 え。

妙子 オガサワラが縮んだ。

梨絵もオガサワラを見る。

梨絵 ……。

妙子 え、あれ、ほんとにオガサワラ？

梨絵 ……。

妙子 子供になった、オガサワラが子供になってる。

梨絵 ……。

妙子 え、私達、ずっと見間違えてたんですかね。

梨絵 ……。

妙子 子供ですよね。

梨絵 ……。

妙子 ……。

妙子は出て行こうとする。

梨絵 どこ行くの？

妙子 どこって。

梨絵 大丈夫だよ。

妙子 大丈夫じゃないですよ。

梨絵 私達、面接を受けに来たんでしょ、あいつが帰ってくるかもしれないよ。

妙子 そんな場合じゃないです。

梨絵 神様が救ってくれるよ。

妙子 ……。

妙子は出て行こうとするが、梨絵は妙子をつかまえる。

梨絵 大丈夫だって。

妙子 私、行ってきます。

梨絵 行かなくても平気だよ。

妙子 冗談言ってる場合じゃないですよ。

梨絵 本気本気、私ふざけてない。

妙子 離してください。

梨絵 神様にまかせようよ。私これ、本気で言ってる。

妙子 バカじゃないんですか？

梨絵 神様にまかせましようってあなたが言った時、私、すごく納得がいったのよね。神様が救ってくれないのならそれはあの人の、オガサワラの、運命なんだって。それにどこか神様を試しているようでドキドキしたの。こんな日本の一市民が世界を創造した神様を試すなんて大それたことじゃない。

妙子 ……。

梨絵 さつきみたいにまた祈ろうよ、祈れば大丈夫だって。大人だったオガサワラはそれで一回踏み止まったんだから、オガサワラ少年にだって祈れば通ずるよ、神様は救ってくれるよ、数十億人いる人類のたった一人ならいくら多忙な神様でもきつと救ってくれて。ね、お願い、行かないで、ここで、ここで、祈ろうよ。

妙子 ……。

梨絵 実を言うとね、私、さつき警察に通報しなかったんだ。でも、誰かが通報してくれてるかもしれない、他の誰かがあのマンションの階段を駆け上がって、オガサワラ少年を抱きかかえてくれるかもしれない、それは神様の力だよ、神様はきつとやってくれるって。

妙子は梨絵を振り払い、出て行く。

長い沈黙。

不意にドアが開いて、妙子が入ってくる。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 間に合わなかったです。

梨絵 ……。

妙子 飛んじやいました。

梨絵 ……。

妙子 あなたのせいですよ。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 間に合わなかったと思うよ、結局。

妙子はうづくまる。

妙子 あーあ。

梨絵 ……。

妙子 あーあ。

梨絵 ……。

妙子 あーあ。

梨絵 ……。

沈黙。

梨絵は窓に行つて、外を見る。

梨絵 え……いるじゃん。

妙子 ……。

梨絵 ねえ、いるじゃん、オガサワラ少年。

妙子 え、あ。嘘です。

梨絵 嘘？

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 なぜ嘘をつく。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 私、普通だ。

梨絵 え？

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 子供があんな所に立ってたら助けにいきますよ、普通。

梨絵 ……。

妙子 好きとか嫌いとか関係なく助けにいきますよ、普通。

梨絵 ……。

妙子 あーあ。

梨絵 どうした？

妙子 だからいつも面接落される。

梨絵 え？

妙子 もう履歴書書きたくないよ。

梨絵 ……。

妙子 もう職務経歴書書きたくないよ。

梨絵 ……。  
妙子 もう面接受けたくないよ。  
梨絵 ……。  
妙子 私、普通過ぎる。  
梨絵 ダメなの普通。  
妙子 ダメでしょ普通。  
梨絵 そうかな普通。  
妙子 たくさん受けましたよ、ファッションデザイナーの採用。でもダメなんです。それは私のあまりの普通さゆえです。オリジナリティの欠如です。  
梨絵 調理師からファッションデザイナー目指すなんて珍しいと思うけど。  
妙子 そんなの表面的なことですよ。  
梨絵 本質をいついてると思うけどな。  
妙子 クリエイティブな仕事って普通の人じゃダメなんですよ。  
梨絵 でも、ほら結局は助けに行かなかったわけだから、普通じゃないんじゃないの？  
妙子 その行けなかったのも普通です。  
梨絵 そうなの？  
妙子 逆にそのまま駆け出してマンションまで行ければ良かったんです。  
梨絵 そうなんだ。  
妙子 でも途中で、この階段降りるところでハッと気がついたんです、自分の普通っぷりを。  
梨絵 ……今からもう一回行ってくれば？  
妙子 ……。  
梨絵 もう一回行ってきなよ、私もう止めないから。  
妙子 ……。  
梨絵 チャンスだよ、普通から抜けられるチャンスだよ。  
妙子 そんな気になれないです。  
梨絵 ほらほら、立って立って。

梨絵は妙子を立ち上がらせようとする。

妙子 やめてください。  
梨絵 ……。  
妙子 やめてくださいって。  
梨絵 君は本当に普通から抜け出たいのか？  
妙子 分かっていますよ。  
梨絵 え？  
妙子 この悩んでる感じも普通ですよね。  
梨絵 うわっ。  
妙子 分かっているんですけどね、自分でも。  
梨絵 うわっ、うわっ。



せず、おとなしくしている。妙子は両頬をすぼめるように手を少ししめていく。

梨絵 ……。

妙子 ……溶けていく顔ってこんな感じなんですかね？

梨絵 見えないからわからない。

妙子 溶ける魚の話、もう一度してくれませんか？

梨絵 覚えてないよ。

妙子 話してください。

梨絵 逆にこの手を離してください。

妙子 話してくれたら離しますよ。

梨絵 こちらも離してくれたら話しますよ。

妙子 梨絵さん。(と、口をさらにすぼめさせる)

梨絵 ほんとに覚えてないよ、適当に作ったんだから。

妙子 じゃ、もう一度作り直してください。

梨絵 え、やだ。

妙子 お願いします。(と、梨絵の顔を歪めていく)

梨絵 自分でつくればいいじゃん。

妙子 できません。

梨絵 誰にだってできるよ、適当に、思いつくままに話せばいいんだから。

妙子 ……。

梨絵 大丈夫、大丈夫。

妙子 ……。

梨絵 はい、どうぞ。

妙子 ……。

梨絵 気楽に気楽に、はい、どうぞ。

妙子 ……魚の中には…溶けていく…魚っていう…魚の…種類…種類じゃなく  
て…あの…種類でいいのか…がいます…その魚の名前は…えっと…名前は  
…名前がちょっと…忘れてしまったんですけど…そんな魚が…います…海  
に…それで…とにかく…溶けていくんですけど…あの…溶けていくんです  
よ…魚が…いるんです…そういう魚が……できない…  
……できないです…

妙子は手を離す。すると、梨絵が妙子の口をつかむ。

梨絵 溶けていく魚がいるって知ってる？ 何千何万匹という魚が群れで泳ぎながら青い  
海に溶けていくの。徐々に徐々に体がトロトロになっていくんだけど、魚の群れは泳ぎ  
続けるのをやめない。溶けて泳いで、泳いで溶けて、やがてトロトロはとろみを失くし  
て、水のようになる。でもね、中にはうまく溶け切れない魚もいて、その魚は溶けるん  
じゃなくてバラバラになっていくの。目とかうることかヒレとか尾っぽとかバラバラに、  
ちぎれるんじゃないかって、パン、パンってはずれていくの。それがプカプカと海に何年も

何年も漂って漂って、不意に消えるの、泡がはじけるように消えるの、パって。あ、意外にスラスラと言えてしまった。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 よいしょ。

梨絵は妙子から離れる。

妙子はスケッチブックを鞆から取り出して、それで梨絵を叩く。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 給食センターって異物混入とか厳しいからコックコートはフル装備で、目と手以外の露出は避けられてるんですよ。

梨絵 ……。

妙子 目と声と全体の雰囲気でその人が誰かを判断しなくちゃいけないんですけど、慣れれば間違うこともなくなる。でも、最初はまったく誰が誰だか分からないんですよ。だから、入ってきたばかりの新人さんは大変なんです。

梨絵 ……。

妙子 それで休憩に入って帽子とマスクを取るから、ようやくそれぞれの顔が見れるんです。でも帽子、マスク着用時の顔から想像する顔とは、みんな違う顔をしているから新人さんはまた混乱するんです。ああ、この人はこういう顔だったのかと。

梨絵 ……。

妙子 でもね、私はすぐに分かれちゃう。式守さんってすぐ声をかけられてしまう、誰よりも早く、名前を呼ばれる。入ってくる新人さん新人さんがみんな最初に私を認識する。それである時、「式守さんて予想通りの顔してますね」って失礼な十代のクソガキ新人に、ついに、そう言われてしまつて……。

梨絵 ……。

妙子 予想通りってなんだよ。お前の言う予想通りってかわいってこと含んでないだろう確実に。予想通り。予想通り。予想通りな式守妙子。予想通りで何が悪い。分かりやすくしていいだろ。私はこのまま予想通りに生きていきますよって、本当にそれでいいのか、式守妙子、本当にそれでいいのか。

梨絵 ……。

妙子 本当は、それでよくない……。でも、どうすればいいのか分からない。何をすればいいのか分からない。今まで通りの、この予想通りの枠内の人生を、どうやって抜け出せばいいのか。

梨絵 ……。

妙子 したらある日、買い物途中でふと立ち寄った占い師のおばちゃんに、「あんたはファッションデザイナーを職業にしなさい」って言われて、あり得ないと思いつつもその日はなぜか興奮して眠れなかった。それから服にお金を費やすようになった。一カ月三

十一日、一日一日違う服を着るようになった。

梨絵 ……。

妙子 そして、調理士を辞めることにした。知識も経験もないけど、ファッションデザイナーになろうって。

梨絵 ……。

妙子 ……よくファッションデザイナーになった自分を想像して笑う。私がファッションデザイナー？って笑う。私いいんですか、横文字の職業についてって笑う。その服、私がデザインしたやつですけど、あなたそれ着ちゃってますけどって笑う。何より全身隠されていたコックコートでなく、ちよつとオシャレな服装で働く自分に笑う。でも、それがいいなと思う。

梨絵 ……。

妙子 はい、では、現実は何？ その前段階で足踏みしまくり、この宙ぶらりん状態、無職、求職中、私は一体何者？ 部屋でひとり体育座りをする、天井を見上げる、不安のかたまり落ちてくる、怖い怖い、デザイナーになりたいよりもこの私何者状態を抜け出たくて、とにかく面接を受けまくる、どんなデザインをしているブランドとかもはや気にせず、経験者のみと応募資格に書いてあるのに、応募したりする。やっぱり、落ちる、落ちまくる……。

梨絵 ……。

妙子 そして、この会社が二十六社目。未経験、年齢不問、女性限定、人と話すのが好きな人、意欲のある人、オリジナリテイのある人、オリジナリテイは別にして、こんな緩い条件は他にない。書類審査は通った、面接にはたくさん描いたデザイン画を持参しよう、それはそれは下手くそなデザイン画だけど、それでも拙い言葉を駆使して駆使しまくってアピールしてやろう、この熱意を買ってくれるだろう、三十路女の切羽詰まった具合を汲み取ってくれるだろう、でも、まさか、今日、こんな展開が待ってはいようとは……。

梨絵 ……。

妙子 きつと今日もまたダメなんだろうな……。

妙子はスケッチブックを放り投げる。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵は自分の荷物を片づけ始める。

梨絵 私、帰るよ、私ごときでよければご辞退させていただきます。まあ、私も別に採用されたわけではございませんが、ほんの少し採用率があがるのでは。

妙子 梨絵さん……。

梨絵 ん？

妙子 もし私その窓から飛び降りようとしたらどうしますか？

梨絵 は？ 飛び降りるの？

妙子 どうしますか？

梨絵 もちろん、がつりつかまえる。

妙子 どうして？

梨絵 だって、目の前にいるから。

妙子 もし私がここじゃなくてオガサワラ少年のいるあの屋上に立っていたら？

梨絵 あなたって分かった瞬間に駆け出してる。

妙子 私って分からなかったら？

梨絵 それでも行くよ。

妙子 オガサワラ少年のところには行かないのに？

梨絵 私、気まぐれだから。

妙子 優しいですね、梨絵さん。

梨絵 優しいよ私は。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 ……。

梨絵 ……。

妙子 ……私を感じてることなんて絶望とは言えないんだろうな。あーあ、飛び降りるなんて言っちゃった……アハハハ、私は何を感じているんだろう。

梨絵は窓へ行って、外を見る。

梨絵 君がそんなところに立ってるから、おばさん達は申し訳ない気持ちでいっばいだよ。

君のことなんて何も知らないのに。

妙子 ……。

梨絵 ……いつ発病するか分からない病を抱えて生きていくのはバカらしいよ、僕もいつかは発病する、幼馴染のように発病して死んでしまう、発病した時が人生の最盛期だったらって思うんだ、その時僕には好きな人がいてすごく愛し合っていて僕はその人のことを思い浮かべるだけで幸せな気分になる、あの娘も何度も僕に好きって言ってくれる、でも、そんな幸せの絶頂で僕は発病してしまうんだ、病院の退屈なベットの上で悶えて苦しんで元気を失くしていくんだよ、お父さんとお母さんが泣きながら僕を抱きしめて、あの娘をおいて僕は死んでいく。だったら、今、飛び降りるよ、ポジティブでしょ、僕はすごく前向きなんだよ、幸いなことに僕はあの娘を知ってるけどあの娘は僕を知らない、同じクラスなのにまだ僕の存在に気づいていない、お父さんは気がつけば泣いているし放心状態だし、お母さんはもう一年以上もどこかに行ってしまったきり帰ってきてないけど、だから、だからこそ希望の未来が現実になる前に僕はいまここで姿を消すよ、悲しいことなんて一切ないよ、晴れ晴れしく僕は屋上に立っている、僕の死が世の中を変えるかもしれない、どこかで今僕を見ている人の期待に応えるためにも僕は飛ばなくっちゃいけない。最後に、僕をオガサワラ菌と呼んだクラスのやつらに不幸を！

妙子 ……何かあったんですか？

梨絵 え？

妙子 何かあったんでしょう、梨絵さんの過去に。

梨絵 何もないよ。

妙子 ……

梨絵 ……

妙子 ……何かあったんですか？

梨絵 ……

妙子 ……

梨絵 何もないって。

妙子 ……

梨絵 何もないから過剰に想像してしまう、それだけ。私はずっと傍観者です。

妙子 ……

梨絵と妙子はあらためてオガサワラ少年を見る。

梨絵 |。

妙子 |。

梨絵 あ。

妙子 あ。

梨絵 今、

妙子 オガサワラ少年と、

梨絵・妙子 目が合った。

妙子 ……

梨絵 ……

長い間。

妙子 ……一緒に行きませんか、オガサワラ少年のところ。

梨絵 どうしたの？

妙子 やっぱり私達オガサワラ少年のところに行くべきなんですよ。それはオガサワラ少年のためとかじゃなくて、私と梨絵さんのために。オガサワラ少年は私と梨絵さんのためにあそこに立っているんですよ。私達のためにあそこで苦しんでる。

梨絵 まるでキリストだね。

妙子 そう、まさにこれは運命だと思うんです。神様が私達に与えた試練なのかもしれない。オガサワラ少年に会えば私達きつと変われますから。

梨絵 変わる？

妙子 行きましよう、行きましようよ、私このジャケット、

妙子は部屋に置かれていた試作品であろうジャケットを適当に選んで手に取る。

妙子 オガサワラ少年に着てもらいますから。これを着たオガサワラ少年の姿を見て、そこからこれからのことを考えることにします。とても長い時間、あのマンシヨンの下で躊躇してしまうと思うけど、実際のオガサワラ少年を見た時のグロテスクさに戸惑ってしまうと思うけど、オガサワラ少年がどうのじゃなくって、私は私のことを考えます。これを着たオガサワラ少年を見た私は2.0つす。式守妙子バージョン2.0つす。梨絵 きつとバカらしくなると思うよ。オガサワラ少年の視線を感じた時、来るべきじゃなかったって、軽薄な自分を恥じるよ、痛いくらいに。

妙子 屋上のドアを開けた瞬間に、目と目が合った瞬間に、声をかけた瞬間に、一歩近づいた瞬間に、服を着せようとした瞬間に、

梨絵 ふと飛び降りた瞬間に。

沈黙。

妙子 梨絵さん。

梨絵 ん？

妙子 オガサワラ少年は溶けますか？ 溶けませんか？

梨絵 ……きつと、はズれていくよ、手やら耳やら鼻やら口やら何やらかんやらが、パカパカはズれていくよ、全部はずれきった時、オガサワラ少年ってどの部分に宿っているのかしら？

妙子 ……服を着せますよ、私が見つけたオガサワラ少年のどこかに、それで自分のこと分かりやすくなると思うけどな。

梨絵 オガサワラ少年は、自分が分かって、それで？ それで？ それで？

妙子 幸せなんじゃないですか？

梨絵 ……。

妙子 さて。

梨絵 行かないよ。

妙子 え？

梨絵 行かないよ。

妙子は周囲を見渡す。

妙子 え、今、揺れませんでした？

梨絵 ……え。

妙子 今、揺れましたよね？

梨絵 ……揺れた？

妙子 揺れましたよ、かなり大きく…あれ、でも、あれ、そうか。

梨絵 ……。

妙子 勘違いか、そっか、揺れてないか…。

梨絵 ……。

妙子　ところで、まだオガサワラ少年はいますか？

梨絵は外を見る。

梨絵　いるよ。

妙子は梨絵の返事を待たずに、外へ出て行ってしまっていた。

梨絵　……。

しばらく時間が流れる。

梨絵は携帯電話のムービーで自分を撮り始める。

梨絵　（自分を撮りながら）さてさて、今、私はとあるオフィスに面接にうかがったのですが、見てください。（部屋にカメラを向ける）ここには誰もいません。私、ひとりしかいません。なんとなんと、あるうことか面接官が面接が始まるや否や出て行ってしまったのです。―（カメラを自分に戻して）このあり得ない状況を生中継でレポートしております。そして、驚くことはこれだけではありません。外には見えませんが、

梨絵は窓の外にカメラを向ける。

梨絵　（カメラを屋上に向けて）あのマンションの屋上に少年が立っているのがお分かりになるでしょうか……見えますか……肉眼でもちよつと……分からなく……なつてきましたけど……見えますか……あそこに……人が……立っているのが………見えますか………。

梨絵は自分にカメラを向ける。

梨絵　……今日はお腹が空いたので帰ります。アディオス。

梨絵はカメラを切ろうとするが、また自分に向ける。

梨絵　オガサワラくん、私、謝らないですよ。でも……。

梨絵はカメラを切つて、携帯電話をしまい、自分の荷物をまとめる。  
そして、窓へ行って、窓を閉める。

梨絵　はい、消去―。

と、部屋の電気を消して出ていく。

おわり